



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

研究ノート 「族」から「系」へ

著者	難波 功士
雑誌名	関西学院大学社会学部紀要
号	98
ページ	107-116
発行年	2005-03-15
URL	http://hdl.handle.net/10236/14001

〈研究ノート〉

「族」から「系」へ*

難波 功 士**

何らかのファッション・スタイルや行動様式を共有している若者集団は、かつては「～族」と呼ばれることが一般的であったが、近年では「～系」と括られることが多くなってきた(表1)¹⁾。こうした現象は、数多くの論者によって指摘されているが(上野, 1999; 山崎, 2000; 上野・毛利, 2002)、その精査や、なにゆえ「族から系へ」と移行したかの議論は、まだじゅうぶんになされてはいない。本稿では、『現代用語の基礎知識』(自由国民社)や『朝日新聞戦後見出しデータベース: 1945-1999』(CD-ROM)、『大宅壮一文庫雑誌記事索引総目録』『大宅壮一文庫雑誌記事索引検索 Web 版 (Web OYA-bunko)』などをもとに、戦後日本社会に登場したユース・サブカル

チャーズ(以下YSと略記)について概観し、その変遷の意味を探っておきたい。

【1】「族≒YS」の時代

現在も、メディアの送り手やマーケッターたちによって、毎年数多くの、さまざまな年代にわたる「～族」が提示され続けてはいるが²⁾、特異なYSとして社会的に広く知られ、そのティビカルな像が多くの人々に認識・記憶された「～族」は、太陽族・カミナリ族・みゆき族・フーテン族・アンノン族・暴走族ぐらいのものであり、80年代に入ってはかろうじて竹の子族・クリスタル族・カラス族³⁾などが挙げられるのみであろう⁴⁾。

*キーワード：若者文化、集合的アイデンティティ、族と系

**関西学院大学社会学部助教授

- 1) 各年版の『現代用語の基礎知識』、1983年版付録『昭和20～56年読める世相・風俗・流行語年表』をもとに作成(大宅, 1965; 赤塚, 1982; 佐藤, 1984; 小林, 1997・2000も参照)。なお、1972年版『現代用語の基礎知識』より、年頭に発売されることになったため、実際の語の発生や流行とは1年のタイムラグが生じる傾向にある。また1980年版『現代用語の基礎知識』より「若者用語」の章が設けられ、「社会がある若者集団に対して与えた呼称」と「若者同士が自他の若者集団に与えた呼称」との差が際立つようになってきた。なお田中研之輔は、これまでの「族」文化研究における空間論的な視点の欠落を指摘している(田中, 2004)。
- 2) メディア等による“Folk Devil”視の例としては、他に期待族(冨木, 1979)、ピーマン族(1981年5月号『警察時報』)、ブラック族(1982年6月27日号『週刊読売』)、ヘビーマタル族(1983年6月号『潮』)、バンド族(1986年11月13日号『アサヒ芸能』)など。マーケッターによる名づけの例としては、一応族(橘川, 1990)や、渋谷には「回遊イワシ族」と「高感度イルカ族」があり、Loftのバッグを提げた「ロフト族」が目につく、といった類(光岡ほか, 1989)。
- 3) カラス族とは、80年代のDCブランド・ブームにあって、「コム・デ・ギャルソンやワイズなどの服を着た黒づくめの人々を、蔑視的に呼んだ名称。無表情、無機質な雰囲気によしとされ、これらのブランドの販売員は無愛想と恐れられていた」人々。「アンビエント・ミュージック、ワタリウム&オン・サンディーズ、アール・ピバン、『美術手帖』、ボイス、パイク、ボロフスキー、西麻布(シリン)、浅田彰、中沢新一」などを愛好したという(1997年11月号『Checkmate』)。1981年12月14日号『平凡パンチ』には、「心齋橋といえば、もうひとつのファッションのメッカ。サーファーやニューウェイヴを東京へ逆輸入させた実績もある。カラス族ファッションも東京中にあふれる日が近いのかな?」とあり、まず大阪で注目を集めたようだ。これ以外にもカラス族には、「カラス族というのは昭和四〇年当時、みゆき族の一部に黒づくめのスタイルがはやったのを名づけたものだが、極めて一時的な現象で、今日では覚えている人も少なからう」(うらべ, 1982: 4)や、大阪道頓堀の戎橋にて呼び込みに励むホストたち(山口, 2002)、さらには青森ねぶた祭りにて黒っぽい服を着て騒ぐ若者たちを指す用法もある(2004年8月8日放送『ザ・サンデー』日本テレビ)。
- 4) 1975年6月19日号『アサヒ芸能』「モボ・モガ族から暴走族まで: アッと驚く全行動をいま明かす」、1975年9月9日号『週刊プレイボーイ』「ヤングライフの開拓者(〇〇族)にみる戦後30年」、1980年8月7日号『女性

表1 戦後の「族」および「系」

年	若者関連の族	若者以外の族
1948		斜陽族
49		
50		あちら族
51		社用族（公用族）、親指族
52		
53		
54	ソーラー族	
55	マンボ族	た行族、自動車族
56	太陽族、月光族、お茶と同情族	抵抗族
57	ドラクラ族、ロカビリー族、カリブソ族、ケロリ族、テンテル族	ペンギン族、よろめき族
58	ながら族、街かど族	団地族、パンガロー族
59	カミナリ族（マッハ族、オトキチ族）、ビート族	サッチョン族、エスカレ族
60	ファンキー族	
61	六本木族	
62		
63	ツイスト族	
64	みゆき族	
65	アイビー族、エレキ族、モンキー族、深夜族	
66	原宿族、ロッカー族	3DKCB族
67	フーテン族、ヒッピー族、イエイエ族、長髪族	ツーカー族
68	サイケ族、奇装族、アングラ族	
69		
70		
71		脱サラ族
72		ハオハオ族
73		
74	暴走族（ナナハン族、サーキット族）、傍騒族	
75	ニュートラ族	社会的不公平族
76	サーファー族	
77		シルバー族、円高族
78		窓際族（→裏窓族、壁際族、水際族、ベランダ族、せとぎわ族、アラスカ族）、ナマバン族（⇔カラオケ族）
79		文化センター族（朝カル族）、夕暮れ族
80	ヘッドホン族、竹の子族（→テクノコ族）、ロックンロール族、アメグラ族	
81	クリスタル族、三語族（→単語族）	
82	ロリコン族、マヤ族	
83	カラス族、ねくら族、まねっこ族	ひょうきん族、まくはり族、とりのこ族
84	くれない族、しなちく族、3D族、ヤンキー族	おしん族、うなだれ族、おこげ族
85	ぶらさがり族、ベルサッサ族、行けない族、ネオ・ヌーボー族	くれない族
86	ドア際族	オジサン族、ハンフリー族、ニュートラ族
87	ダブルスクール族	アンマリ族（シングル族、ML族）、ないコン族
88	ダーツ族、東京アパッチ族、Hanako族	たそがれ族
89	カウチポテト族（こたつむり族）、いちご族	カウチエダママ族、討ち死に族、中年ひまわり族
90	おたく族、新深夜族、朝シャン族	濡れ落ち葉族、逆夕暮れ族、ホタル族、あ〜&ライド族
91	一応族、イタトマ族、ブラザー族、車高族、パーキング族	3ナイ族、新みゆき族
92	ひげ族、いちおう族、渋谷カジ族	ランチタイムレジャー族、LT族、中年ちょんまげ族、五飯族
93		カルコール族、リングアーバン族
94		老人深夜族、オソト族、ダンチュウ族
95	ドリフト族、ゲジコ族、自分族、ポチ族	雨宿り族（新腰掛け族）
96		かけろろ族、マルゼロ族、ゼロヨン族、休ブラ族
97	なごみ族	
98		散り花族
99		住まい渡り鳥族、低煙族
2000	原宿ふくろう族	もうイラナイ族
1	新親指族	裏原宿バギー族
2		
3		

表中の→は派生を、⇔は一對の語として誕生したことを示す

若者関連の系	それ以外の系	「族・系」以外の若者への呼称
		アプレ・ゲール
		戦後派(⇔戦中派)、愚連隊
		安後派(⇔安中派)
		ニューヤング
		ハマトラ
		指示待ち世代
		一般ピープル
		新人類、団塊ジュニア
		フリーター
		オタッキー、チーマー
		ゾッキー
	汗キツ系	コギャル
	ビーイング系	ヤンママ
渋谷系		
		アムラー
だらしな系		シノラー
アキバ系	複雑系	
ハット系、キューティー系、マイクロ系、ビジュアル系		ヤマンバギャル、ジベタリアン
あゆ系、ジャニーズ系、裏原系、マルイ系、大人系、マイナー系(⇔メジャー系)、詩人系	出会い系、癒し系、和み系	
		ヒッキー
B系		

「太陽族に始まる若者の〇〇族は、戦後の混乱が一応収拾し、社会に余裕が出てきた昭和30年代前半から、カウンター・カルチャー（対抗文化）が一定の収束を迎える昭和40年代なかばにかけて、ほぼ毎年のように登場してきている。一般に、これらの〇〇族は、自分たちの反社会的な行動によって、自らの存在を社会に主張するため、一定の場——とくに都市の中心街に集まって、大衆の目前で何らかの表現を行うという特徴がある。このことは、ただちにマス・メディアの好む情報となり、マス・メディアを通じて全国に広がっていく。そしてまた、その情報を知ること、新たな若者たちがその場に集まってくる。この相互作用を通じて、〇〇族が生れ、拡大し、拡散してやがて解体していく」（奥野，1985：66）

そして奥野卓司は、昭和40年代以降の若者文化における「〇〇族から〇〇マニアへ」というシエマを提出する。だがこの論文が書かれて以降、諸マニアはやがて「おたく（族）」、さらには「アキバ系」——奥野の現在の用語では「多元的マニアックス」（奥野，2004）——と総称されていくように、ある趣味や音楽・ファッションなどへの嗜好を共有する若者たちは、「〇〇系」と括られるようになっていった。

【2】「族≒暴走族」への移行

1972年の富山事件をきっかけに「暴走族」の呼称は一般化していき、1974年の警察庁次長通達「暴走族に対する取締りの強化について」の中で「暴走族とは、自動車を運転し、集団で最高速度違反、信号無視、整備不良車運転等の暴走行為を行う者をいう」と公的な定義が与えられた（渡辺，1983）。それまでカミナリ族・マッハ族・オ

トキチ族・原宿族・サーキット族・狂走族など、さまざまな呼称で呼ばれていた集団が、暴走族の語に収斂していったのである。

そして、暴走族が70～80年代に大きな社会問題としてあり続けたために、徐々に「族」は、暴走族の略称として、さらにはバイク・自動車関連のYSをあらゆる接尾辞として使用されるようになっていった⁵⁾。たとえば、1992年版『現代様の基礎知識』に採録された「ゾッキー」という若者用語は、暴走族の別称——ないしは他の若者たちからの蔑称——であり、1991年10月9日号『SPA!』の特集「パーキング族、レディース、チーム、追っかけ…群れたがる少年・少女の“規律と快感”」には、「渋谷のチームはほとんどが大学付属の高校生か大学生で、アルバイトもあんまりしないのが特徴だ。ところがクルマ関係の“族”たちは意外と地味に働いてローンを返している」といった表現が見える。

この『SPA!』の特集においては、チョッパー族（アメリカンバイク風にハンドルを改造）・パーキング族（首都高速大黒パーキングエリアなどに改造車で謂集）といったクルマ関連のYSが挙げられているが、他にもバイクで峠道などを攻めるローリング族（1987年3月14日付『朝日新聞』）、長距離にわたる弾丸レースを行うキャンボンボール族、富士スピードウェイのグランドチャンピオンレースの際に集結するグラチャン族（暴走族対策関係省庁協議会，1988）、渋谷公園通りに車高を上げた改造4WDで集まる車高族（1988年9月16日号『FRYDAY』）、暴走行為を期待し、見物に集まる期待族（長山，1989）、ローライダー風の改造車族（1990年8月9日号『GORO』）、ナンパ族（野田，1991）、ドリフト族・ゼロヨン族（1991年6月20日号『週刊宝石』）、スピーカー族（1991年8月28日号『SPA!』）、首

自身）「街頭で見る若者ファッションの戦後史：太陽族から竹の子族まで」、1987年5月号『checkmate』「ZOKU フーズク大研究」、1991年2月28日号『GORO』「平成不良宣言：好き勝手に生きた時代の不良たちは、いつも族といわれてきた!」、2004年8月号『STUDIO VOICE：クラブカルチャー伝説80's』「本邦遊び人カルチャー年代記」など参照。なお、かつて大衆的な人気を誇った『平凡』誌読者の若者たちを「平凡族」「ミーハー族」と呼んでいた段階では（西村，1954）、マスカルチャーの一般的な受け手ないし担い手が「族」呼ばわりされることもあったが、やがて特異な若者集団を「～族」と称することが通例となっていた。

5) たとえば、1992年11月4月号『SPA!』「出来あいのモノではガマンできない バリチェーン族：改造への限らない欲望」には、スーパー4WDやローライダーとともに、改造法の一スタイルとして「族車」が挙げられている。また、暴走族を写しつづけた吉永マサユキの写真集のタイトルは、『族』（2003年、リトル・モア刊）である。

都高速を猛スピードで周回するルーレット族 (1994年6月13日号『週刊大衆』)、同じく阪神高速環状線などでスピードを競う最高速族・環状族 (1998年4月16日発行『別冊宝島376: 裏関西で遊ぼう!』)、巨大スピーカーを積んだ改造ワンボックスカーで大阪梅田に集うナビオ族 (1998年6月16日発行『別冊宝島391: 超コギャル読本』)、大型セダン車を改造するVIP族 (中国新聞暴走族取材班, 2003)、ウーハー族・アメ村族 (2003年7月3日付『読売新聞(夕刊)』関西版)、派手な改造が特徴のギンギン族 (2003年7月15日付『読売新聞(夕刊)』関西版)、クルマによる「たむろ」とナンパ行為を繰り返すハント族 (2004年8月15日放送『報道特集』TBS) と、クルマ関連の「族」は枚挙にいとまがない。

【3】ヒトとモノのウェブとしての「系」

こうして「族」の用法が、二輪車・四輪車を媒介としたYSへと限定されていったこともあって、やがてある音楽やファッションへの嗜好を共有するYSは、「～系」と括られるようになっていく⁶⁾。もちろん「外資系」「柑橘系」「理系/文系」といった言葉は以前からも存在したが⁷⁾、「“楽しい系”のコトバ」(中森, 1988: 74)といた、「～系」のよりフリーな使用例は80年代

後半に現れ、90年代に入った頃から、若者同士のコミュニケーション、もしくは若者に対するレイベリングの場で多用されるようになり、「～系」は一種の流行語と化していった(米川, 1998; 小林, 1998)⁸⁾。

「女子高生ならすぐわかる「〇〇系」ってどういうイミ?」「最近では、あまりに便利なため、いい年をした大人も使いはじめています。とんねるずが、『ねるとん紅鯨団』で使って流行したとされる、「〇〇系」「××関係」という言い方である。／たとえば、わかりやすいのが「体育会系」や「ジャニーズ系」。前者は「大学の体育会に所属していそうな、角刈りの硬派なオニイサン」のことだし、後者は「ジャニーズ事務所に所属していそうな、ちょっと中性的で、ソフトな感じの男のコ」ということになる。／しかし、こんなのはいまでも使われていて不思議じゃない、わかりやすい例。たとえば、「福山系」というと、最近女子高生に人気の歌手兼俳優「福山雅治に似た感じの男」ということになり、「福山雅治」を知らないオヤジには意味が通じなくなる。／同様に、「チーマー^マ関係」といえば、「渋谷の“チーム”にいそうなストリートファッションの、ちょっと不良がかった男のコ」だし、「ヤバ系」といえば、「その筋と関係がありそうなヤバイ感じの男」と

-
- 6) 地域・世代・階級・性差などに根ざしたサブカルチャーズから、テイストによる棲み分けへという動向は、何も日本の若者文化に限ったことではない (Willis, 1990; Thornton, 1995)。また中西新太郎は、ジャンルを横断する「センスのタイプ分けは「～系」と表現されてきた」と指摘している (中西, 2004: 102)。
- 7) すでに1979年10月11日号『an-an』「ファッション系統図」において、「ニューヨーク・トラッド、シティ・カジュアル、スポーツ・カジュアル、サバーバン・ルック、コーペ・エレガンス、オーサカ・サーファー、ハマトラ」といったタイポロジーが示されている。また、1981年2月号『アクロス』「現代若者風俗大研究『タコツボ』カタログ」の段階では、アイビー・プレッピー・ハマトラ・JJなど「たこつぽ」の上位分類の概念として、整理のために「トラッド系」という言葉が使われている。
- 8) 1992年時点での渋谷のストリートやクラブシーンのレポートでは、インディーズ系・ナゴム系・ライブ系といった音楽の嗜好の違いや、「一応夜遊び系 (の女の子)」「(学校の普通の男の子とチームの男の子とならば) 彼氏にするならどっち系がいい?」「(今はケンカが楽しいので) これからは、結構、そっち系にいくだろうナ」といった語法が採取されている (1992年7月8日発行『別冊宝島158号: あぶない少女たち』JICC 出版局)。小林信彦によれば、1995年あたりから「例えば「あの本は実は〈トンデモ系〉じゃないかな」という風に使われるようになった」という (小林, 2000: 164)。また1995年版『現代用語の基礎知識』の「若者用語」には、「…系: …の類。「青身系の魚」「フカフカ系の枕」「きれい系の服」などと用いる。「お水系」は「水商売関係」をさす」とある。この「～系」という言い回しは、「…モード」「…関係」「…方面」「…状態」やアップトーク (半疑問形) などとともに、若者コトバ特有の曖昧表現とされることが多い。たとえば「最近の若者がよく使う「〇〇的」という言い方は、物事を曖昧に軽くする効果があります。／もうひとつ、「〇〇系」という言い方もありますが、これも同じように物事を曖昧にするニュアンスで使われています。おそらく'70年代後半から'80年代ぐらいに流行った、物事のカタログ化が根底にあるのでしょうか。つまり情報を「～的」「～系」とデジタル的に整理することで、ジャンル分けしていくわけです」(岩松, 2001: 59-60)。

ということになる。／ともかく、「〇〇系」といえば、すぐにどんな相手かがイメージできてしまうのが、最近の女子高生。ポキャブラリーを補うための、格好の形容詞ではある」(ヤングライフ調査班, 1995: 76)

こうした「[~系]系YS」の中で、まず広く世間に知られたのは、「渋谷系」であった⁹⁾。これは渋谷の外資系レコードショップのコーナーに、あるテイストを共有する音源が並べられたことをきっかけに、1993年頃から音楽ジャンルを指して使用され始めたコトバであったが、その音楽のファンたちの間に、独特のファッション・センスやライフスタイル、音楽だけではなく映画・雑誌などへの嗜好が共有されていた点が注目される。

以降、かつての「族」ほどのユニフォーミティはないにせよ、緩やかな規範や何らかのテイストを共有しているYSとして、ストリート系(1994年12月号『checkmate』)、古着系(アクロス編集室, 1994)、モード系・コギャル系(1995年12月6日号『SPA!』)、アキバ系(1996年9月号『アクロス』)、裏原(宿)系(1996年10月号『checkmate』)、

京都系(京都に本拠を置くファンタスティック・プラスチック・マシンの音楽やグルーヴィジョンのグラフィック・デザインなどのガーリーなテイストを愛好、1999年10月18日号『Olive』)などが90年代には数多く登場した¹⁰⁾。そこには、以前の族のように、多くのモノを介在させつつも、対面状況下での相互の認証の中から、ある集合的なアイデンティティを立ち上げていくプロセスは存在しない。また族が、自称にせよ他称にせよ、ある人々への呼称であったのに対し、系の場合は、ある商品群やコンテンツ群などモノの集合を指す用法もあり、それを消費する人々の間には、きわめて希薄なつながりや、ごく不確かな前提の共有しか想定できない場合も多々ある。

そして現在、ストリートファッションにおけるクラスターとして、女性に関しては「ギャル系、ガールズ・カジュアル系、ボーイズ・エクストリーム系、コンサバ・キャリア系、スタイリッシュ・フェミニン系」が¹¹⁾、男性に関しては「ギャル男系、カジュアル・コンテンポラリー系、エクストリーム系、ヒップホップ系、モード・カジュアル系」が見受けられ(渡辺・城, 2002)¹²⁾、

9) この頃、「渋谷(族)」から「チーマー(系)」へという変化もあった(柄内, 1993)。なお、「ビジュアル系」は渋谷系に触発されるかたちで、それまであった「ビジュアルロック」から派生してきた用語。もちろんそれ以前にも、「髪立て系」「化粧系」という表現もあったが、音楽業界の一部でのみ通用し、ビジュアル系のような一般化にはいたっていない(井上ほか, 2003)。また、「[~系]」っていうのも、今まではそれがジャンルとして認められていなかったものをジャンル化できた言葉なんです。だから、ファッションのことを指すのでも、人に系をつけるだけで済んでしまう。例えば「吉川十和子系」ってことでジャンルとして成立しちゃう(1996年5月号『Views』「'96春現在 死語の世界」)といった、徹底的な細分化も進んだ。

10) 1994年12月号『ポップティーン』「トーキョー女子高生スタイル図鑑」には「サーファー系、ボーダー系、ロリタ系、スケーター系、シスター系、オギャル系、ダンサー系(シスター系ダンサー、タボダボ系ダンサー)、コギャル系」、1995年12月6日号『SPA!』「[タイプ別] ダサイグランプリ」には男性編「暴走族系・ホスト系・ヘビメタ系・モード系・おたく系・ストリート系・フォーク系」と女性編「コギャル系・水商売系・モード系・ボランティア系・おっかけ黒服系・ピンクハウス系・コンサバOL系」、1996年8月12日号『Bart』「六本木ギャル、夜の仁義なき戦い。」には「クラブ系、ジュリアナ系、ヴェルファーレ系、コギャル系、中立系」といった分派(clique)が挙げられている。1995年4月号『BOON』では、「崇拜系DJファッション起源説」が唱えられ、いわゆるカリスマDJたちから派生したナイロンJKT系(JKT=ジャケット)、ジャージ系などのクラブ・ファッションが紹介されている。またYS以外にも、音楽ジャンルとしての小室系(1996年9月25日号『SPA!』)や、若者以外にも包含する電波系(1995年11月1日号『SPA!』)・鬼畜系(1997年8月20日号『SPA!』)なども登場した。

11) もちろんこうした分類も、時々刻々と変化していかざるを得ない。たとえば、2000年の時点では、女性は「コンサバ・フェミニン系、ギャル系、ボーイズ・カジュアル系、ガールズ・カジュアル系、インポート・セレクト系」と分類可能であったが、数年を待たずしてこうした微調整が必要となっている(渡辺, 2000)。

12) 2004年4月1日号『egg』の特集「最近の男の子ってどうよ?」では、「嫌味のないキレイメコーデで今年イチバンの注目スタイル お兄系」「ルーズシルエットが基本!HIPHOP好きならちょっとワルテイスト! B系」、「カジュアルさが基本!どんな流行もここから始まる! ストリート系」などが挙げられている。この「お兄系」とは、もともとは「お姉系」スタイルから派生したもの——なお、カタカナ書きの「オネエ系」の場合は、いわゆるニューハーフを意味する——であるが、さらに「お兄ギャル系」の場合は、お兄の彼のファッションに

さらに「ギャル系」内だけでも「サーフ系、セレブ系、お姉系、お兄ギャル系、GAL系、アルバ系、マンバ系、チョイB系、B系、リゾート系、ミリタリー系、ウエスタン系、ロマカワ系」といった細分化が進行しているという（2004年8月1日号『Shibu☆スナ』¹³⁾。

【4】族というアイデンティティから、系というアイデンティティへ

「イギリスのパンクのスタイルを研究したディック・ヘブデジは、彼らのスタイルを、人類学者のレヴィ＝ストロースの提起した「ブリコラージュ」という概念で特徴づけている。病院のガゼや安全ピンやポリ袋など、本来衣料品でないものまで含め、あり合わせの素材を組み合わせて自分のスタイルをつくってしまうパンクと日本のギャルは、物を用いて「具体的に」思考するという方法は共有しているといってもいいかもしれない。／彼女たちのスタイルは、しばしば「ギャル系」「お姉系」、あるいは音楽と結びついて「ヒップホップ系」「ビジュアル系」とか、講読雑誌によって「JJ系」「ViVi系」などと、「系」ということばでくられる。一つづきに関係するものを指す「系」とはいい得て妙だが、そのなかで、ひとりひとりが外面のアイデンティティ（差異）を持つようとしている」（野村，2004：385）

そして野村雅一は、日本のさまざまな「系」は、

「イギリスのモッズやスキンヘッド、パンクなどのように、境界のはっきりしたサブカルチャーの「トライブ（族）」ではない」と指摘する（野村，2004：389）。たしかに、一人の人間が何らかのYSに四六時中コミットしているというよりは、その日の気分や、その日に会う相手によって自らの系を取捨選択し、随時変化させていく、もしくは並存させていくというのが若者の現状なのであろう¹⁴⁾。また、2003年版『現代用語の基礎知識』からは、「…系」の解説が、「①…の類。秋葉系は東京の秋葉原に集まるパソコンやゲーム好きのマニアックな若者。②その状態、様子。「いま、寝てた系？」＝いま寝てたの？「読んでた系」＝読書してたんだ」となり、②の用法が加わっている。もはや「～系」は、何らかのアイデンティティを表すというよりも、その場の様相や心境を示す語と化したわけだ。

だが、辻大介が示したように、個々人にはそのコアとなる部分が存在し、そのコア同士が結びつくのが「全面的で親密な対人関係」であり、それ以外は「部分的で表層的な対人関係」であるという二分法は、すでに今の若者を論じる際のモデルとして相応しくない。一個人の内に多くの自己が重層的に緩やかに連結し、並存している今日的な若者像においては、「部分的だが表層的でない対人関係」も成立し得るのである（辻，1999）。ならば、つねにある「族」であり続け、互いに深くコミットしあう集団ではないにせよ、その時々

影響を受けた、女性のファッション・スタイルを意味する。具体的には、バーバリーやエンポリオ・アルマーニなどのブランドを好むギャルたちを言う。

- 13) 2004年10月号『Popteen』によれば、「お姉」はさらに「デビュー系・お嬢系・キレイめ系・いい女系・お兄系・美黒系・セレブ風」に細分化されるという。古典的な意味でのYSというよりは、最近の若者用語に言う「キャラ」に近い「系」ではあるが、その系毎の壁は時には厳然としてある。たとえば、金原ひとみ『蛇にピアス』の主人公は、舌にピアスをした途端、「二年前にクラブで知り合った、コテコテのギャル」である友人のマキに「まじまじと私の舌を見て、いーたっそー、と連呼して顔を歪めている。／「どういう心境の変化なの？舌ピなんてさ。ルイ、パンクとか原宿系とか嫌いじゃん」といった反応をされる（金原，2004：21）。なおこの場合の「原宿系」は、ギャルやお姉の「渋谷系」と対立する個性派ファッションを意味する（中村，2004）。一方斎藤環は、原宿系ファッションの若者の、自身の趣味や感性へのこだわりを指して「ひきこもり系」と名づけ、じぶん探しモードの渋谷系や地元つながりを重視する池袋系に対置している（斎藤，2001）。
- 14) もちろん、まったくの他称である「～系」の場合は、そう呼ばれる側の存在や人格を無視しかねない危険性も含んでいる。極端な例で言えば、集団レイプ事件において「なかでも格好の餌食とされたのが、「キャバクラ嬢みたいな派手な女性とは正反対の、ちょっとポッチャリして胸が大きい女性」（学習院大・小林大輔）。仲間内では「和田サン系」と呼ばれていた。事務所近くのレンタルビデオ屋でよく、レイプ物やセクハラ物のAVを借りていた和田が、逮捕前に借りた「空手家VSレイプ魔」なるAVの主演女優も、確かに「和田サン系」だ」（2004年8月号『新潮45』「スープリ集団レイプ事件 早慶・東大…名門大学生たちの「宴のあと」」）といったように、拉致する側——「ラチリ系」（今，2004）——からの一方的なカテゴライズもありうる。

選びとった「系」によって、同じ系のヒト・モノと結びついたり、他の系と棲み分けたりといった、「～系」な状況における対面もしくは非対面の共存によって何かをシェアすることが、その当事者（たち）にとってより皮相で、非本質的なものとは言いきれまい。「系」としか呼びようのない、輪郭のあいまいな自己表現の方法や集会的な心性であっても、それが自己の存在確認として切実に希求されているがゆえに、今日もまたさまざまな「系」が生み出され続けているのである¹⁵⁾。族がクルマ関連の逸脱行為（者）群と等置されたという外在的な要因だけでなく、系としか呼びようのない繋がりやまとまりが、今そこにあるがゆえに、系という語が90年代の日本社会において顕在化・一般化したのである。

参考文献

- アクロス編集室編 1994『ヘタウマ世代：長体ヘタウマ文字と90年代若者論』PARCO 出版
- 赤塚行雄編 1982『青少年非行・犯罪史資料①～③』刊々堂出版社
- 暴走族対策関係省庁協議会編 1988『暴走族対策ハンドブック』立花書房
- 中国新聞暴走族取材班 2003『トッコウ服を着ない日』日本評論社
- 月刊『アクロス』編集室編 1983『LOOK BACK JAPAN』PARCO 出版
- 井上貴子ほか 2003『ビジュアル系の時代』青弓社
- 岩橋健一郎 2004『「族」俺達の流儀』バジリコ
- 岩松研吉郎 2001『日本語の化学』ぶんか社
- 金原ひとみ 2004『蛇にピアス』集英社
- 橋川幸夫 1990『一応族の反乱：若者消費はどこへゆく？』日本経済新聞社
- 小林千早 1998『ことばの歴史学』丸善ライブラリー
- 小林信彦 1997『現代〈死語〉ノート』岩波新書
- 2000『現代〈死語〉ノートII』岩波新書
- 今一生 2004『大人の知らない子どもたち』学事出版
- 光岡健二郎ほか 1989『ザ・渋谷研究』東急エージェンシー出版部
- 長山泰久 1989『暴走族と高校生・中学生』屋久孝夫編『暴走族』同朋舎
- 中森明夫 1988『オシャレ泥棒』マガジンハウス
- 中村泰子 2004『「ウチら」と「オソロ」の世代：東京・女子高生の素顔と行動』講談社文庫
- 中西新太郎 2004『若者たちに何が起きているのか』花伝社
- 難波功士 2000『ストリート・ファッションとファッション・ストリート』『関西学院大学社会学部紀要』88
- 西村一雄 1954『乙女たちは考える：「平凡」読者との文通』1954年9月号『思想と科学』
- 野田建次 1991『共同危険行為』藤本和男・岡野博司編『交通非行と暴走族問題』開隆堂
- 野村雅一 2004『スタイルとしての身体』関根康正編『〈都市的なるもの〉の現在：文化人類学的考察』東京大学出版会
- 奥野卓司 1985『情報社会の若者』『都市問題研究』37-2 (410)
- 2004『日本発イット革命』岩波書店
- 大宅壮一 1965『社会風俗用語の解説』『現代用語の基礎知識』自由国民社
- 上野俊哉 1999『解説：都市の部族のために』、Savage, 1999
- 上野俊哉・毛利嘉孝 2002『実践カルチュラル・スタディーズ』ちくま新書
- 冨木章次 1979『期待族：土曜の深夜に寄り添う若者たち』『少年補導』24-10
- 斎藤環 2001『若者のすべて：ひきこもり系 VS じぶん探し系』PHP エディターズ・グループ
- 佐藤郁哉 1984『暴走族のエスノグラフィー』新曜社
- Savage, John 1999 (岡崎真理訳)『イギリス「族」物語』毎日新聞社
- 田中研之輔 2004『都市空間の管理と路地裏の身体文化』『日本都市社会学年報』22
- Thornton, Sarah 1995 "Club Cultures: Music, media and subcultural capital" Polity press
- 柄内良 1993『女性高生文化の研究』ごま書房
- 辻大介 1999『若者のコミュニケーションの変容と新しいメディア』橋元良明・船津衛編『子ども・青少年とコミュニケーション』北樹出版
- うらべまこと 1982『流行うらがえ史：もんべからミニ・スカートまで』文化出版局
- 渡辺明日香 2000『携帯電話・PHSを使いこなす人はおしゃれ消費も大』『化粧文化』40
- 渡辺明日香・城一夫 2002『ストリートファッションと街の相関性に関する研究』『共立女子短期大学生生活化学科紀要』45
- 渡辺義正 1983『暴走族に走った少年たち』『犯罪と非行』58
- Willis, Paul 1990 "Common Culture: Symbolic work at play in the everyday culture of the young"

15) 2004年10月2日から「JAM系」（朝日放送）が始まったが、これは雑誌『JJbis』の読者モデル出身のグループJAMを全面的にフィーチャーした番組である。ある雑誌を核としたYSが、関西ローカルの深夜枠とはいえ、ひとつのテレビ番組として成り立っている点は注目に値する。

Westview

- 山口晋 2002「大阪・ミナミにおけるストリート・パフォーマーとストリート・アーティスト」『人文地理』2
- 山崎鎮親 2000「子供たちのリアリティ」門脇厚司・久富善之編『現在の子どもがわかる本』学事出版

- 米川明彦 1998『若者語を科学する』明治書院
- ヤングライフ調査班編 1995『花の女子高生ウッフ…の秘密』河出書房新社

From 'Zoku' to 'Kei'

ABSTRACT

In Japanese, whenever coinages were formed to express a certain youth subculture, the suffix 'zoku' was used. For example, in the 1950s, young people who were influenced by the novel, 'The Season of the Sun' were called 'Taiyo-zoku (Sun Tribe)'. 'Zoku' means a tribe or group which shares the same sense of value, attitude toward another youth subculture or generation, taste for shopping or leisure, manner of speaking or gestures, etc. However, since the late 1980s, the suffix 'zoku' has been taken over by the suffix 'kei'.

Usually, 'Kei' has been used for indicating a clique which shares same the taste for fashion or music. For example, 'Shibuya-kei' was originally a genre of music which was popular in the first half of the 1990s among young people who liked to go to record shops or clubs in the Shibuya area. Thereafter, the meaning of 'Shibuya-kei' was expanded to describe the fashions, movies, or style of publishing, which were favored by the people who liked 'Shibuya-kei' music.

Comparing 'zoku' and 'kei', the former means primarily a group of human beings, while the latter is sometimes used for expressing a certain genre of music or fashion. In other words, 'Kei' is a complex of people, artifacts, places etc., which are connected by a certain common sense of value and taste. While the members of 'Zoku' maintain a sense of identification and face-to-face contact, 'Kei' is more mediated and ad-hoc. The members of one 'Kei' can simultaneously belong to another 'Kei' and they can properly use different identities depending on the situation. I think the transition from 'Zoku' to 'Kei' reflects some significant social changes, especially among young people; such as the increase in mediated communication, consumption-oriented trends, and multiplicity of identities, as they are released from the sense of belonging to a class, gender, generation or locality.

Key Words: youth culture, collective identity, Zoku and Kei